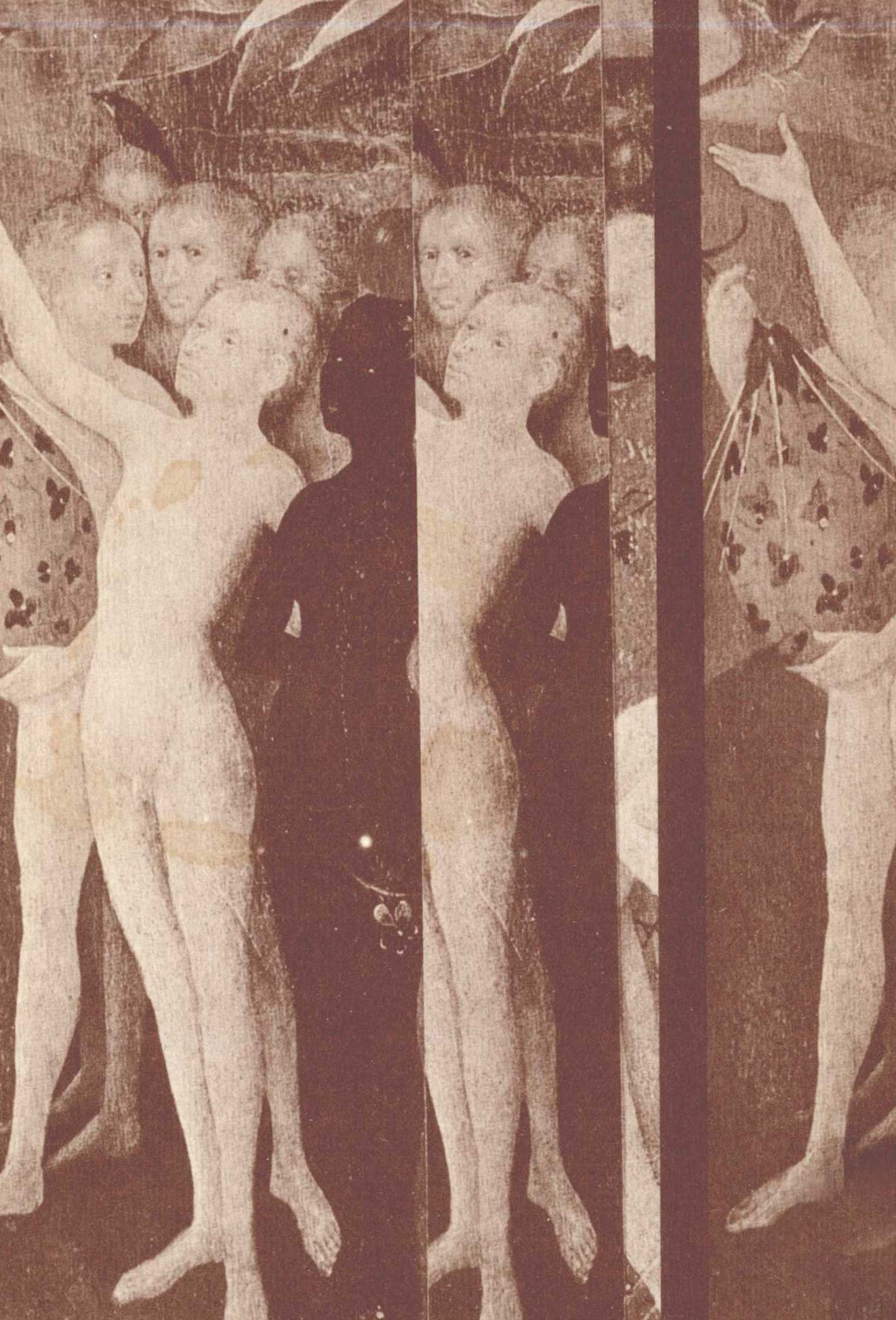




雄義卷荒
代聖神

徳間書店

■著者紹介■

昭和8年、北海道小樽生れ。早稲田大学文学部、北海道大学土木科を卒業。札幌にあって家業を継ぐかたわらSF同人誌を主宰して自らも作品を発表。昭和45年「SFマガジン」に発表されたSF評論『術の小説論』短篇『大いなる正午』で一躍注目を浴びた。以後、独自のSF観に基づくハードSFのほか、近年は超古代史に材をとった伝奇ロマン、伝奇ミステリーの分野でも精力的な活躍を続け、異才が揃う日本SF界の中でも特異な光芒を放つ存在となっている。

著書に『白き日旅立てば不死』『黄金蔵の睡り』『空白の十字架』『ある晴れた日のウィーンは』などがある。

神 聖 代

昭和五十三年五月十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著 者 荒 卷 義 雄

発行者 徳 間 康 快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(433)六二三一(番代表)
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします)

神聖代／目次

神聖試験 五

クララ館 二五

四位一体 六五

南方教典 九五

自動人形 一二七

宇宙時計 一五七

神聖航路 一八五

快樂けらくの園 二〇九

空想と想像——あとがきに代えて 二三五

解説／筒井康隆 二三七

荒卷義雄作品譜 二四二

イラストレーション

デザイン

矢島高光
浜田泰介

わたしは裸で母の胎を出た
また裸でかしこに帰ろう
主が与え、主が取られたのだ
主のみ名はほむべきかな

イジチュール “至福千年” 年表 (抄) (IJ紀元)

一八二年	“南北二百年戦争”の終結。“二つの世界線”確定。大教
二二三年	国の布教権、南天球一千光年以内に定められる。
二八八年	“五つの銀河・聖なる知恵の法”成立。
三一三年	“超空間航法における〈場〉の理論”発見。
三二三年	異端者ダルコダヒルコ斬首刑(第一次宗教会議)
四二〇年	アルゴル一世“神聖学”を指定。神聖資格試験の開始。
四二〇年	アルゴル四世、“節食令”布告。
五六七年	エロニムス・ボッサ作“快樂の園”の解釈をめぐる異端
	裁判(第二次宗教会議)
六四〇年	五六七年以降の内戦了る。国土荒廃。
七〇八年	大跳躍航法 ビッグジャンプ の実用化。
八八六年	ローラン宇宙航路の開発。教国圏の拡大。
九〇〇年	宇宙の“タクラマカン砂漠”発見。
九七五年	ボッサ星発見。

神聖試験

1

（とうとう目的地だ！）——と餓えつつKは思った。きむようにブレーキをかけた列車は、いったん鉄橋の上で停まったが、また牛車のように動きだして、薄闇色の鉄橋を渡りおわった。眼下の河床は、旅の途次にKが目撃した数本の河と同じように完全に涸れきっていた。大教国を襲っている早魃は、首都も例外ではないのである。

Kは鉄格子付きの列車の窓に鼻を押しつけ、まなざしを後方にそそいだ。その過ぎ去った向う岸の世界に、依然として夜が残留していた。まるで、そのさして広くもない無名の河が、闇と光の世界をくつきり分け隔てている境界線でもあるかのように、背後の対岸はすっぱり黒々とした暗夜の壁でさえぎられていた。

反対に河のこちら側は、まばゆく照り輝いているのだ。白い塔が朝日をあびて、都の空に林立している。そのあてやかな景観が、空腹感に悩まされつづけるKにはまだ幻のように思われてならない。というのは、その長旅の間中、

彼はずっと夢うつに過ごしてきたからだ。……

（そろそろ、しゃきっと目を醒まさなければ……）となおまだ夢心地の自分にKは言いしかせた。Kにとっては、いま渡り了った鉄橋が、たといまだ瞭つきりとは意識されぬにしろ、彼の新たな出発点のように思われたからであった。乗客たちがまだ席について、睡りこけているというのに、Kは誰よりも早く立ちあがった。網棚からたった一つの手荷物の雑囊をおろし、肩にかけ、いささかよろめく足を踏みしめながら、彼は人々の睡りを妨げぬように気をつかいつつデッキに出た。

汽車は既に首都の周囲をとりかこむ高い城壁をくぐり抜け、緩々徐行しながら、ごみごみとした市街地を進んでいた。

（噂にたがわず大きいなあ……）とKは思った。

手摺に身をのりだした彼は、かなり大らかな心持になって、胸一杯まだ涼しいその大気を吸い込んだ。そして自分が、正真正銘、都の空気を吸っているのだ、と改めて誇らしい気分になった。……

やがて、汽車はガタンガタンと咳き込むように前後に揺れながら、さほど大きくはないホームにすべり込んだ。列

車が完全に停まりきらぬうちに、Kは猫のように身軽くデッキからとびおりて、しっかり石だたみのホームに足を踏みしめていた。

彼は胸を張って歩きはじめる。そして改めて、自分がこの足で首都イジチュールの大地を踏んでいるのだと考えていた。……

終着駅のホームの外れは切りたつた高い崖で、通路用の素掘りのトンネルが口をあけていた。多分、化石を含むそのオーカー色をした層状の砂岩が、都全体の基盤を成しているのだらう。首都が、広大な荒野の只中に露出した大きな岩盤の上になつてゐることは、Kの予備知識にもあつた。石のスロープと階段を昇ると、トンネル同様素掘りのままの大きなホールに出た。ところどころ柱の部分だけを掘り残して、高い天井を支えていた。そこに柵がしてあつて、いかめしい制服を着けた監視員が待ちかまえていた。その一人がKに向つて「おい、書類ッ」と威張つた声で叫ぶ。

Kは、胴巻の中に大事に収めていた受験票と添付書類をとり出して渡した。

すると、横柄だつた男の態度が急に改まり、「どうぞ、

お通りください！」と、大袈裟すぎる身振りで彼に道を開けてくれた。

Kははなはだ得意な気持である。柵を通り抜けてから振り向くと、あとから来た降客たちは、一人一人厳重な審査を受けていた。……

Kだけが監視員の特別扱いを受けたのは、彼が神聖職登用試験といういわゆる神聖試験の受験者だつたからだらう。第一、それでもなければ、この大教団にたつた一本だけ走っているあの汽車にさえ乗ることもできなかったのだ。予備試験の合格通知と一緒に送られてきた切符のおかげで、彼は生れてはじめて汽車というものに乗れたのである。

まっ直ぐホールを突つきつて終着駅を出たKは、しばし駅前の広場の縁りにたたずんだ。駅は、ずんぐりした砂岩の小山を穿つて出来てゐることが、外に出てはじめて分つた。広場はひどく埃っぽく感じた。正面に聳えてゐるのは市庁舎の建物らしい。写真で知つてゐる教皇庁は、その右手の高い突き出した岩山の上に輝いてゐた。

神聖試験は明日からはじまる。懐中がほとんど無一文といつてよい彼は、今夜は市中のどこかで野宿するつもりだったが、としても丸一日の時間がある。Kの心づもりでは、

市中の図書館へでも行つて、明日からはじまる試験の準備にでも充てようか、などと考えていたのだが、空腹感のためか未だ頭の片隅がぼんやり澱んでいて、どうにもその気になれないのだった。自然、足は人混みの方へ向いていた。その中心は朝市になっていたが、早魃のためか市場に並べられてゐる穀物、果実、肉や川魚その他の食糧は全く乏しかった。中には見たことのない雑草までが混じつて売られている。市民たちの顔色も冴えない。ことごとく土色の膚をして、表情は無気力でさへある。物乞いも何百となくいて、行きずりの者に向つて哀れっぽく小銭や物をねだつていた。

おそらく耕地を捨てて、教皇国の各地方から流れてきた連中なのであろう。さつき、市のゲートで監視員たちが見張つていたのは、そうした連中を首都の中に入れぬためだった。現にKの村は比較的豊かだがその周辺では大勢の人民たちが餓死したり、逃亡したりしているのである。いやその一部は強盗団をつくつて村々を荒しまわつてさへいるのだ。だから今更別に物珍しい眺めでもないのだが、それでもKにとつては矢張り一応新鮮な驚きであった。首都がこの有様では、どうやら早魃の規模は想像以上に広汎で深

刻らしいと、彼にも理解できたからだ。

物乞いたちも、さすがにKには声をかけない。Kの身形はといえば、裸足にカーキ色の襦袢をまとつただけで連中ときほど変りなかつたからである。……

ともあれ、Kの腹はも早おさえようもなく「クウ」と間断なく鳴りつづけている。といつてほとんど無一文の彼は、市場に並んだ並みの食物とは無縁の存在である。だが、市場を一通り見回つたあと、Kは目星をつけた屋台に近づいた。屋台の親爺ばかりが肥つて、群がっている客はみんなKのように痩せ細つていた。

「チャバをくれ」と言つてKは、びた錢一枚と引き替えに、平べつたいパン一片を受けとる。頬張ると小石が混じつていて、Kの奥歯にガツツと衝撃を与えた。目方を殖やすために粘土を混入してあるからだ。Kは悟りきつたようにそのまま嚙み込んでしまふ。一口で言えば、極めて不味かった。単に空腹を鎮静させるだけの代物で、栄養価の皆無であることは、明朝の排便を確かめればひと目で分ることだ。……やがてKは、歩き回れば回るほど腹が減るのだという必然の理に気がついた。

事実、ここの大勢の人間たちは、路上のあちこちで無為

に横たわっているのだった。彼らはひねもすそのようにしているに違いない。それでKも、彼らの知恵を学ぶことにした。Kは、先刻通りすぎた広い大通りの四つ辻に大きなバイヤンの樹が、この激しい旱魃にもめげず生き生きと豊かな緑葉を美事に繁らせていることを思いだした。(その木蔭の下で休むことにしよう)とKはきめた。

しかし、人々の考えることは誰も同じらしい。バイヤンの木蔭は、浮浪者の群で溢れていた。

Kは、異臭を放つ彼らの間に足を踏み入れ、坐り込める場所を探した。彼らはみな、疲れ果てた眼に虚の翳を宿していた。中には生きているのか死んでいるのか分らぬ、年寄った者もいるのだった。……

横たわった人々の上を跨いで、日蔭の端からバイヤンの樹のほうへ進んでいくと、坐れそうな隙間が一つあった。Kは足を留め、その傍にうすくまっている女乞食に目頭で「そこはいいのか」と問い掛けた。うなずいた女乞食は、腰のわきに寝かした赤児を抱きあげて、場所を空けてくれた。

「ありがとう」と、口を利くのも億劫そうな彼女に礼を言つて、Kは腰をおろした。

だが、牀の触れそうな狭さである。女乞食は胸を開いて赤児に乳を含ませはじめた。Kはなるべくその乳房のふくらみを見ぬようにして、意外に思われるほど綺麗な彼女の横顔を窺う。彼女はまだ若い母親だった。

とまれ、バイヤンの木蔭は、彼の予想した以上に涼しかった。わずかであるが風も吹き抜けていく。女乞食の薄汚れたはつれた髪が、細面の頬にまつわりついている。

赤児はまる裸だった。女児である。彼のほうを見て無心に笑いかけた。Kも仕方なく笑いを浮べたが、どうにも赤児の性器が気になるのだった。なぜなら、それは彼にとって全くはじめて視るものだったからである。いや全然知らないわけではない。だがこうしてまざまざと身近に視たのは、これが最初の経験であった。

Kは、ひどく罪深い気分におちいった。「視てはいけない」彼は自分を叱りつけて、口の中で聖イジチュール様の御名を十遍ぐらい唱えろと、こんどは視線を石ばかりの街路のほうに彷徨わせた。それは乾き切って沈黙していた。市民たちは暑気を避けて、家の中にひき籠っているのだから。ときどき乗物が行きすぎる他、人影はなかった。……やがて、Kはその視線の散歩にも倦きた。彼は言い知れ

ぬ倦怠感に支配され、明日から始まる神聖試験のことを考えるのも面倒臭くなった。(だいたい予備試験に受かったことすら奇蹟だというに、本試験に受かる可能性など皆無に近いと言っている。だから気持を楽に持とう……)(とにかくおれは、予備試験に通ったお蔭で、生れて始めて汽車にも乗れたし、首都も観ることができたのだ……)

そんなことを、Kは自分に言つて聴かせていた。……

2

——Kの育った村は、首都イジチュールから何百キロも降った地方にあった。それは鉄道の通じている近くの町から、さらに二日も歩いて行く場所にある。村の周囲は、見渡すかぎり岩だらけの荒野で、昔は穀物の豊富に穫れた地方だったそうだが、今は完全に砂漠化している。それでもKの村には塩辛い水だが井戸が一つあったので、集落ができていた。Kはそこで生れて、育った。学校も初等教育だけ受けた。大教国の方針で、全土の人民たちは十歳になると聖イジチュール様の教えを義務として学ばねばならなかったからである。

その僧院の学校は、Kにとっては興味のある所だった。むろん先生は教戒師である。Kは彼から文字を習ったのだ。またこの人物がどういうわけか特にKには目をかけてくれて、自分の歳書を自由に読ませてくれたことは有難かった。ま、Kの成績が村の他の少年たちに較べて群を抜いていたので、この教戒師は自分の後継ぎか、いや当分の間は下男を兼ねた助手の代りとして使うつもりだったのではなかったろうか。……

ともあれ、このKの恩師はずいぶん不可解な部分を持つ人物である……ということ、村内のみならず近隣の村々でも評判の男であった。

まず彼の名前だが、ヒボクラスといった。躰付きの巨大さと、魁偉な容貌が人目をひき、彼の目を剗いたときの顔付きときたら、あまりの怖ろしさに赤ん坊などが泣き出してしまふことも再三あった。それがまたこの老いたる教戒師の怪奇性をより高めたのだ。むろん村人たちはこの翁を大いに尊敬していた。いや畏怖したと言ったほうがいい。そしてあれこれとこの人物にまつわる噂というものを、Kは幼い頃からよく耳にしたものだ。しかし、なぜかKはこのヒボクラスに気に入られて、しばしば教室でこの教戒

師が振う鞭の懲罰を、Kはついぞただの一度も受けたことがなかった。……

それでKのほうも、いつの間にかこの人物を妙に好きになって、自分で建てた村外れの差掛小屋から、いつしか僧院の納屋に移ってそこで寝起きするようになっていたのだ。

Kの仕事は、水汲みとか掃除などの雑用であつた。その報酬は、日に二度与えられる食事きりだつた。しかし、それまでは村人たちの家畜の世話や野良仕事の手助けでかつかつに生き抜いてきたKにとっては、全く楽なやり易い仕事だつた。また彼が使用を許された納屋は、古いがベッドなどもあつて以前の彼の小屋と較べたら雲泥の差があつた。それで彼はすっかり金持になつたような気分以至極満足であつたわけである。

だが、と言つて村の物持の少年たちのように遊び呆けるわけには行かない。檢出した余暇は、これを専ら僧院所蔵の書物を耽読することに充てた。そして、こういう生活を数年間続けるうち、次第に彼は師の見込んだとおりの知識を身につけて、師の代りに教室で教えることができるようになったのだ。

(けど、そんなおれだからと言つて、必ずしも神聖試験の

予備試験に合格できるとは限らなかつたのだ) (いや、それどころか受験者の大部分が僧院大学の出身者だつていうし、おれなどが予備試験に受かつたのは本当は全くのまぐれだつたのだ)

実際に、Kの地方で行われた予備試験では一〇〇人近い受験生が集まつたが、合格したのはKひとりだけだつたのである。

——とまれ、昼頃になると首都イジチュールの気温は四〇度を超えるほどに騰つた。しかし空気は全く乾燥しているので、日蔭で休んでいる限り耐えられぬ程ではない。だが、今の季節でさえもこの有様なことから、やがてやってくる盛夏がどのような激しい暑熱の氣候になるかは、Kにも想像できた。おそらく、昨年を越す数百万人の死者が、今年も出るにたろう。しかし、この数世紀来、地球自体の乾燥が激化しているのだから手の施しようがないのである。人民たちはそうした死の到来を、運命と心得て諦めきつてゐるのだった。

かつては、樹木が繁り作物が稔つていた領土の大部分は、今では完全に砂漠と化しているのだという。そして、イジチュール大教国(至福千年)期の最盛期には数十億にも達

していたといわれる人口も、今では千分の一に激減したのだそう。その理由は様々に取り沙汰されているが、最大の原因は、人々が海水からエネルギーを取りはじめたからなのだそう。そのため海水の水位が二〇〇メートル以上も低下し、気候が激変した。

現に、Kの村の在る地方にも、その頃の海水分解工場の遺跡があった。Kの幼年時代、よく獲物を採しに行ったところである。遺跡の内部にもぐり込むと、錆ついたパイプや動かなくなった機械の残骸などが、半ば砂中に埋もれて残っていたりした。

それからKは、少しばかり睡った。食い物の夢を視た。目覚めたときは睡眠のお蔭で、よどんでいた頭はかなりすっきりしていた。だが、朝食べた、たった一枚の代用チャパはどうに消化されており、Kはふたたび浅間しい程空腹を感じはじめた。彼は、雑糞の底を漁って褐色に干乾びた茸の切れ端しを採り出し、口に含んでくちやくちや咬みはじめた。その中には、神経作用を滅殺する成分が含まれているのだ。これを多用して発狂する者も大勢いるが、それは一種の幻覚作用を伴う精神異常に陥らせるからだ。

だが、この際、有害だと知りつつも背に腹は替えられない。飢えに苦しむ大教国の人民は、生活の知恵で実に様々の神経麻痺薬を原野に自生する植物中から見つけ出して、激しい飢渴を紛らわせるために愛用しているのだった。

とまれ、Kの空腹感はやや鎮まった。しかし酷く物憂い気分だ。彼は無気力状態に堕ち込み、ぼんやりと四囲の仲間たちを見詰める。諸所に横たわっている浮浪者の群は、まるで全てが死者であるようにも見える。が、骨と皮ばかりに瘦せ細り、腹部だけが異常に膨れている彼らは、それでもまだ生きているのだ。

その哀れな彼らの有様を眺めながら、Kは改めてイジチュール聖紀（I-J）四二〇年に公布された教皇の布告の命令を思い浮べている。その節食の奨励と過食の罪惡を述べた勅書の中で、アルゴル四世は人民にこう告げているのだ。

“……もしわが民が飢えるならば、われも共に飢えよう。全ての民が死に絶えるとき、われも共に飢え死のう。しかし、その前にわれらは偉大なる予言者イジチュールの聖なる言葉に従って、われらが聖なる霊とわれらの穢れた肉体とを分離しなければならない”

教皇はそう述べて、自ら率先して節食の範を示されたのである。

半年前の郷里で行われた予備試験のときも問題として出されたから、Kはよく記憶している。そのとき教皇庁直轄のイオン放送局が、全人民に伝えた教皇の食事内容は、日にコップ二杯の水と肉の小片一切れ、それに少量のパンと野菜を盛り合わせた小皿のみであった……。

とすれば、イジチュール大教国の飢餓は既にKの生れる遙か以前から始まっていたのだ。

むろんこの、南半球の大教国に限らず北半球と同様であった。いや、いまだに大人口を携える北の現状は、ここ以上に悲惨である。

そこでは、全ての国家はとうの昔に解体していた。人民は野蛮化し、その一部では人食いさえも日常慣習となつてゐるほどののだ。

Kは、虚な目を閉じる。(この世界の飢えに、自分は耐えていかねばならない)そして、(飢えは生あるものの宿命なのだ)と思う。しかし……。

予備試験の設問は、このアルゴル布告の感想を述べよ、というものだった。そのときKは、ありのまま自分の思う

ところを答えた。

彼は、己が卑小さについて語った。わが意志の薄弱なることを告白した。……そうなのだ。聖者イジチュールの教えのとおり、精霊が肉体に宿ることによってこの世界に人間が生れ出するならば、超絶的な存在である精神と、餓えた存在である肉体との分離は可能であり、人は摂食せずとも生きることができる。

現に、『南方教典』の中には、聖イジチュールが断行した七七七日間の断食に關することが記されているのだった。

とすれば、絶えずKとして恥じなければならぬのは、彼自身の意志の弱さであろう。わずかの節食にさえ彼は、早くも浅聞しくなりかけているのだ。むしろ路傍に横たわり、びくりとも動かず只死を待つ流浪の彼らの方がKよりはるかに偉大でさえあった。

(ああして彼らは、ひと月もふた月もじっとしているのだ。むろん、彼らは間もなく死ぬであらうが、それはあくまで肉の死でしかない。霊は、聖イジチュールの導きによってあの緑の天国へ行くのだ)とKは思った。だが、彼の思考はそこでふたたび停滞していた。

いや、空腹のためにすっかり浅聞しくなったKは、女乞

食の赤ん坊がしきりに吸いつづける乳の匂いに氣を奪われてしまったのだ。彼女の乳房は、妙にそこだけがふっくらしていた。やがて赤児は満腹したのか、すやすやと睡りはじめると、女乞食は真青な瞳でKの方をじっと見詰めると、不意に「あなたも吸う？」と話しかけてきた。

「ええ……」と無意識に答えたが、すぐ、はっとわれを取戻した。「いや」とKは呻くように呟き、顔を赫らめて下を向いた。胸の鼓動が早鐘を打つように動悸していた。

Kは知らぬ間に視姦の罪を犯していたのである。女体がどういふものなのか、Kは未だ実物を視たことがない。ただ想像するだけである。そして、いつも彼はそれを幻視しているだけだ。Kは慌てて聖天才イジチュールの名を二〇度唱えた。己が罪惡を恥じ、消去するために……。

が——、街は、ますます異臭を放っていた。まるで発情した生きもののような……そして汗をかいていた。……

3

その翌朝、試験場に充てられた市庁舎の講堂に行ったKは、昨日終着駅に到着したときの誇らし氣な自信を、いっ

べんに喪失した。

全領土から選抜されて集合した受験者数は、Kの予想をはるかに上回り、優に一〇〇〇名を超えていた。

控室の広間は、詰めかけた受験者の人いぎれでむんむんとしていた。関門の監視は嚴重を極めていた。いちいち名簿に記録された指紋と本人のそれが照合され、合致しなければならぬ。

大講堂は、見上げるほど天井が高かった。巨大なドームが組み合わされて、聖イジチュールの生涯を表わす天井画が描き込まれていた。

視ると、その高い天井の回廊にも制服をつけた監視官の姿がちらちらしていた。

Kは、自分のネームが記された中ほどの席に着いた。連続アーチで仕切られた中庭に近い席だったので、そこ

は光線が明るかった。彼は、いささか落ち着けぬ気分です。席の周囲を見回す。いずれも手強そうな相手ばかりだ。年齢は区々である。だがKのような少年は、彼の眼のどく範囲には一人もいなかった。何か、場違いの所に紛れ込んでしまったような氣がするのだった。第一、隣席の受験者などは彼の祖父の齡に相当するほどの年輩者である。そし